

## 王朝貴族の病氣

上市厚生病院長 越山健二

糖尿病に関する記載は古く紀元前1500年頃のパピルスにみられるという。この時代に於いてトルコ領の開業医Aretaeusの記載によると、糖尿病は人間にはそれほど多くないが、不思議な病気で、肉や手足が尿に溶けて出てしまう。水腫と同じく、その原因は寒さと湿気に関係がある。経過はどの患者でも一様で、腎臓と膀胱とが侵される。患者は水を造る事を瞬時もやめず、水道の口から流出することく、その流出は絶え間ない。しかも病氣の性格は慢性で、形をとるまでに長い時間がかかる。しかし、いったん病氣の体制が完全に確立されてしまうと患者は短命で、溶け出しは急速で、死も又、急である。かわきはいやすべくもなく、いくらのも尿の流出が多くて、大量の尿に追いつかない。しばらくの間でも水をのまないでいると、口はからからにかわき、からだは水気がなくなってしまう。と、このように述べている。水は人体をはしごとして、そこを通りすぎてゆくところからサイホンの意味をもつDiabetesという名前がつけられた。イギリスの医師Thomas Willis (1621—1675)はこの病氣に罹患した人の尿は驚くほど甘い事を見出しCallen (1709—1790)は甘くない多尿の症状を示す尿崩症(Diabetes insipidus)と区別するためにDiabetes mellitusをつけ加えた。

日本に於いては歴史的な記載は余り残されていないが、糖尿病に一致すると思われる症状の記載がある。平安時代は貴族たちが数多くの物語、随筆、史書、日記を書きのこした

時代である。藤原道長自身の日記「御当関白記」、藤原実資の日記「小右記」及び「栄花物語」などがあり、これらをもとにしてまとめた『王朝貴族の病状診断』の資料によると、彼等の病氣や医療の事がかなり詳しく述べられている。この事実は現代医学の面から眺めてみても非常に興味深い。

藤原道長は位、人臣をきわめ、歴代天皇の<sup>おきさき</sup>后を自分の娘で独占、一家三后の榮に浴し、紫式部の源氏物語の主人公光源氏のモデルといわれるほど、青春時代は美丈夫であったようだ。30才代は「咳病」、「風病」といわれた風邪や頭痛、又、時おり「痢病」即ち腹痛などにかかり、39才の時には「霍乱」にかかり、はげしい嘔吐で心身の無力状態になった。47才、瘧病といわれたマラリヤにかかった。この頃まで健康であり、この世をばわが世とぞ思う望月の欠けたる事のなしと思えば、とうたった道長も長和5年(1016)正月、三条天皇に讓位を迫り後一条天皇の出現によって外祖父として摂政の地位を保った51才頃から急に病氣がちになる。即ち「口乾き力無し病。にとりつかれる。藤原実資の日記「小右記」「栄花物語」によると、しきりに渴を訴え水を飲むようになった。昼夜にかかわらず多飲したが、食物は減少しなかったようだ。摂政仰せられて言う。去三月より頻りに漿水を飲む。就中近日昼夜多く飲む。口乾き力無し。枯稿の身体まだ尋常ならざる如しと記してある。よく濁酒を多飲し、美食、多食に原因があった。これら物語や日記によると、先ず道

長の一族には糖尿病が多い事である。伯父<sup>これ</sup>伊尹<sup>ただ</sup>が栄花物語によると「水を飲みきこしめし」972年、49才で死亡、長兄道隆もやはり「水を飲みきこしめし、いみじう細らせ給い」995年、43才で没した。日頃<sup>これら</sup>から大酒家であったという。その道隆の子、伊周も「日頃水がち」で1010年、37才で死亡した。

道長、50才代からたびたび激昂するなど不安定な精神状態があり、今日でいう躁うつ病的な症状を示したものと思われる。53才頃より「御堂関白記」は亥時許りよう胸病に悩み甚だ重しと記す。そして連日「心神不覚」を訴えている。小右記は「去夜悩み給うの間、叫び給う声甚だ高く、邪気に似たり。」と記している。この様な発作は頻発し、4月から翌年6月まで胸病の発作数十回に及ぶと記されており、今日でいう肺疾患ではなく心疾患で心臓部の疼痛や苦悶感があり短時間で治る事から、狭心症の症状と思われる、望月の歌を詠

んだときは、こうした病苦にさいなまれていたのである。更に11月になると目えざる由を言う。近づくも則に汝の顔殊に見えずと、眼病にかかり、視力が衰えていたのであり54才の2月には二三尺相去る人の顔見えず、只手に取る物のみ先を見る。何ぞ況んや前庭の事をやと思ひ驚くこと千万念、と眼病悪化を嘆き悲しんでいる。病気に呻吟しながら62才、病勢が悪化、10月には痢病（腹痛）、11月には失禁状態になり、背中に癱が吹き、乳房ほど大きくなり、11月末には意識不明となり、12月2日針で膿血を出し悲鳴をあげたが4日早朝に息を引きとったという。

この事実を現代医学の面からてらしてみても遺伝や発病年齢、症状、経過、合併症がよくあらわれており、美食、運動不足は平安時代の王朝貴族の病気として、象徴的示されているように思い、興味深いものがある。